





分！變りもないか大將！

マルウ コレ／＼ 慎め！

トービ さア此方へお出て、一寸お出ッてばさ、オイ大將、那麼ナ分別臭い顔をして居る癖に、地獄の鬼と鬼ごっこをするなどは洒落過ぎて居るぜ、彼麼ナ黒鬼の畜生なンド叩ッ殺すがいい。

マリア トービ様、祈禱でも述べさせておやり遊ばせ、祈禱でも。

マルウ 祈禱ぢや、女猿奴ッが！

マリア とても神信心などする柄ではないと思つて居ましたが、成程ネ。

マルウ エ、退り居れ、獸物奴等何れも此れも粒の揃ふた小人原身どもなど、は人間の種類が違ふて居るぢや、その内思ひ當ることがあるであらうぞ。

とマルウウオーリオ退場

トービ これはどうも事實とは受取れない。

フリビ 若し恁麼ナ物が芝居の舞臺にても掛けられたら、私などは除り空々しい虚構だなど、批評し兼ねませんナ。

トービ どうも奴さん、首ッ丈當方の策略に溺ッたやうぢや。

マリア てもこのまゝ手放しは危い、折角の計畫が露れてヘチャになると大變でムります。

フリビ ても餘ンまり拵めると正眞の狂人になつて了ひます。

マリア 狂人にもなつて呉れ、ば什麼ナにお邸か静謐になるか知れはせぬ。

トービ これから一ッ彼奴を眞暗な座敷牢に叩き込んでやるのぢや、姪



どのはモ一彼奴をキ印と信じて居る。ツマリ此方のお娯樂にもなり  
 又彼奴の膺懲にもなるのぢやから何所までもこの機を外さず甘く  
 立ち廻らう。さて、その舉句に於て此方の興も冷め面白味も盡きて彼  
 奴が可哀相になつたら、その時は一伍一什の顛末を發表して衆議に  
 かけ、卿には狂人の裁判官たる月桂冠を奉るるとしやう——

この時アンドロニーの姿を認める、

おツと來た〜。

サー・アンドロニー登場

フアビ さア又一ツお茶番の種が殖えました。

アンドロニー意氣昂然として、

アンド これがソノ、挑戦状であります、御一覽を願ひたいもので、確かに

藥味は充分さいて居る筈であります。

フアビ 那麼ナにさいて居ますかナ？

アンド それは受合であります、兎も角も御一讀を願ひたいのであります。

トービ どリア俺が讀もう。

と受取りて朗讀す、

「やをれ二才、汝は何所の馬の骨か知らねど、兎にも角にもカッタイの徹  
 恨みなり」

フアビ 甘い〜、いかにも強さうぢや。

トービ 「余が汝を捕へて斯く罵るともゆめ〜、怪むなかれ、驚くなかれ、  
 余はその理由などを説明するの暇はなし」

フアビ 出來ましたナ此文句は、法網をくゞり抜けるのには詭向さぢや。



トイビ 「汝はオリヅア姫の許に來り、余が面前をも憚らず大に厚遇を辱  
らす。兎も角も無禮至極不届千萬也。余が汝に決闘を申込むの理由は  
爰に存ず」

フアビ これは簡潔ぢや、そして大變よく辻褄が合つて——居ませんナ。

トイビ 「余は汝の歸路を待ち伏せして居るべし。かくて若し汝の悪運強  
くして余が首を取ることにあらば——」

フアビ 甘い！

トイビ 「これ悪黨の仕業なり、山賊の所爲なり。」

フアビ 何所迄も法律の風上へ避けて通りますナ。甘い！

トイビ 「余は汝の武運長久を祈る。願くは天帝余等兩人の魂魄の一方に  
慈悲の眼を垂れ玉へ。事によると天帝の御厄介になるのは余かも知

れねど、大概勝利は此方のものなり。かるが故によく——お氣をつけ  
て御座れ。辱知の仇敵アンドリュー・エーグチーク」

イヤ此手紙を受取つて腹が立たない位なら、腰も矢張り立たない弱  
蟲に相違ない。どりア私が之を届けてやらう。

マリア それには何より好都合、丁度あの人、只今姫君とお會話最中、モ  
「直に告別ますよ。」

トイビ 行くべし——アンドリュー氏、そして庭園の隅で監視の役を引き  
受けて呉れ。いよく姿が見えたらば早速抜刀になり、抜刀になつた  
ら早速大に毒吐くのぢや。一体粗暴な口上をピリ——する大音聲で  
怒鳴り立てると誠に威勢の善いもので、その人がいかにも強さうに  
見えて來る。實際の手腕よりも却つて効能があるものぢや。さア早く



アンド イヤ悪口は拙者のお手のものぢや。

とアンド退場

トービ さて此手紙を手渡すのも餘り面白くない、どうもあの小姓中々の人柄で素養も深いやうぢや、主人の公爵と自家の姪どこの中間の掛橋をやつて居るのを見ても分ることぢや、して見れば此無茶な手紙を見た所が、些ッとも畏怖を抱かぬも知れぬ、必然大笥棒の薄莫迦から寄越したものとしか思ふまい、よし、拙者が直接に口上で決闘を申込んでやらう、アンドローを一件の英雄豪傑の如く吹聴して呉れう、まだ若年のこと故、まんまとアンドローを買かぶつて、手腕の達者な命知らずの我武者と思ふであらう、さうすると二人はお互

ひに鬼胎を抱き合つて、一と目見合つた丈でそのまゝコロリ往生するかも知れぬ。

フアビ アレ其當人が姫君と連立ちて此方に参ります、しばらく打ち棄て、やり過ぎて置いて、早速後から追ひかけるが宜しうム。

トービ ヨシ、その間拙者は氣味の悪い喧嘩買ひの辭でも考へておく。

とトービ、フアビ、及びマリア退場

オリヴァ、ヴィア、ヴィオラと連れ立ちて再登場

オリヴァ 卿の心胸は木か石か、さうとも知らず、今日この頃の口説三昧、ツかり顔に泥を塗りました、わが身ながら淺ましいとは知りつゝも、それで居て倅めることのならぬとは、何とまア片意地な心根でムリ



ませうぞ。

貴嬢様の御様子にそっくり違はぬが、とりも直さず主人公爵の日の頃の有様。

オリゲ アノ、モシこの品を御肌につけてはくださらぬか。

と寶石もて鑲めたる小形の肖像を出し、

これは妾の肖像でムります。つき戻してはくださるな、これには煩い舌がついて居ませぬわいな。それから明日も是非お出でを願ひます。妾の名にかゝはらぬ事なら、何なりときいてあげますほどに。

他にも願ひ申すこととしてムりませぬ、なと主人公爵を愛していたときますばかりで。

オリゲ でも既に貴所にさしげたものを、更に公爵に捧げたとありては、

妾の名にかゝはりますわいな。

それなら無理にとは申しませぬ。

いづれにしても明日又お出でなされませ、御大事に——卿のやうな魔性の者にかゝつては妾は地獄に墜ちて了ひます。

とオリゲア嬢退場

トービ及びフアビアン再登場

これは善う御出でなされました。

毎度御邪魔を致します。

時に貴所は餘程御用心が肝腎でムりますぞ、いかなる遺恨があるかは存じませぬが、兎に角貴所を附け覗ふ人がムつて、それが血相かへて腕に燃をかけて、今や遅しと此庭園の隅に貴所の來るのを待



伏せて居りますぞ。まづ腰の刀でも抜いて、いざといはゞ飛びかゝるやうに御用心なさるがよい。當の敵は輕捷で、腕が利いて、そして、生命知らずの山狗でムるぞ。

ウイオ それはお人違ひでムりませう。私は確かに他人と喧嘩などした覚えはムりませぬ。この胸の鏡には、他人から遺恨を受けるやうな翳はかゝつて居りませぬ。

トービ 所が拙者が保證致すが、中々さうでないことが直に分ります。若し貴所が、少しでも生命が惜しいと思ふなら御用心に限りませぬ。貴所の敵手は若くて強くて、腕が利いて、そしてヤケに怒つて居て、先づ近頃珍らしい程の豪敵でムりますからナ。

ウイオ アノそれは全體什麼ナ人でムります。

トービ 武士でムるナに別に戰場往來の武士と申すほどではムりませぬが、しかし喧嘩にかけては實に鬼神を欺く豪の者、既に身首所を異にされた人間が三人もムる。殊に目下の憤激方は一と通りでないから、先づ生命を奪られぬ、お慕の厄介といふ所まで、こぎつけなくては收まりがつかますまい。死ぬか生るか興るか奪るかといふのが、口癖の人でナ。

ウイオ ては私は今一度お邸宅に戻ります。そして姫君に護衛をつけて戴きます。私は劍客ではムりませぬ。世間には自己の勇氣を試みたいばかりに、わざと他人に喧嘩口論を買ふものがあるやうにきいて居りますが、多分この人などもその種類の氣紛れ家かと存じます。

トービ イヤそれは相成りませぬぞ。何にしる彼の遺恨は一と通りなら



ぬ侮辱から起つたもの、それ故潔よく立ち向つて相手の望み通りの事をさせねばなりません。邸に戻るなどは以ての外、若しもさういふ事なら、この拙者が引受けてお相手仕るが、それなら結局危険い理窟は同一ぢや、それぢやによつて早速これから立ち向ふか、それともこの場に於て抜刀を以て拙者に向ふか、何れにしても此儘で済まぬ丈は確かなものぢや、それがお厭とならば、今後は一切腰の刀を打ち棄てらるゝがよい。

ウイオ　これは不思議ナ、そして同時に又無法な御言葉でムります。折入つてお願ひ申しますが、右の武士に對して拙者がいかなる遺恨の種を蒔いたか、一應御尋ねの程を願ひ度う存じます。何にぞ粗忽の振舞位はあつたかも知れぬと、決して故意に何も致せし覺えはムりま

せぬ。

トービ　承知致しました。モシ、フアビアンどの、拙者の戻るまでこの御方の側を離れぬやうに依みますぞ。

とトービ退場

ウイオ　モシ、貴所は何ぞこの事件に就いて御存知の事もムりますか。  
フアビ　イヤ手前はたゞこの御武家が大變貴所様に遺恨を抱き生命の與奪をしやうとして居るのを存じて居る丈、その他詳しい來歴は些つとも存じませぬ。

ウイオ　全体什麼ナ御様子の人物でムりますか？  
フアビ　單にその御様子を拜見したばかりでは、別に無茶に強さうに見えませぬが、眞剣にやつて見ると、畏ろしいのでありますナ。全く以てあ



れ位手腕の冴えた、あれ位慘酷な、そしてあれ位劍呑な敵手は、イリ、ア國中を探し廻つたとて決して二人とはムリですまい。兎に角行つて見ませう。若し手前の力に及ぶことなら是非御仲裁を致しませう。

ウイオ さうしてくださいれば誠に難有うムリです。私などは、武士は武士でも實は脛節に近い方で、別にこれが他人に知られたとて苦勞にもなりませぬ。

と兩人退場

トービ、アンドロニーと共に再登場

トービ イヤどうも、彼奴はまるで鬼神の再来ぢや。那麼ナ鬼夜叉はまだ生れて目撃た例しがない。俺は一寸試みに試合つて見た、勿論抜刀ではない、鞘ぐるみぢや。所が、その突き方と言はうものなら誠に電光石

火避けるにも受け留めるにも到底人間業では及びもない。又その反撃の確かさときては、あたかもこの足で地面を踏むが如しぢや。何んでも、世間の風評によれば、あの小姓奴は、實はさる所の國王の御抱劍士ぢやツたといふことぢや。

アンド それは飛んでもない事になつたものであります。私はモ一手出しは御免ぢや。

トービ イヤ、と言つて斯うなつては、モ一先方がとても承知しない。フアビアンが一生懸命引き留めにかゝつて居るが、引き留められずに弱つて居る。

アンド これは弱つたことでありますナ。若しもそれ程劍術が達者であるとなつたなら、決闘の申込などは忘れても致すではなかつた。あゝ



この儘見逃がしてくれれば實に難有いさうすれば御禮には拙者秘藏の黒馬の名を差上げても苦しうないが……

ト一ビ 兎に角拙者が掛ケ合つて見て上げませう。爰に突立ッて居らッしやい。成るべく豪勢な面構をして居ねば可けませぬぞ。是非生命に別條のないやうには取計つてあげます。旁白先づしめたぞ。此奴をせしめる序でに馬を一疋せしめて呉れよう。

フアビアン及びウイオラ再登場

ト一ビ 「フアビアンに向ひ旁白」 喧嘩の仲裁賃として俺は馬を一疋取りあげてある。この若者を非常な豪の者と思はせたのぢや。

フアビ 小姓さんの方でも酷い恐がりやう。せかく氣息をはづませて蒼くなつて、まるで脚下に熊でも居るやうな鹽梅。

ト一ビ 「ウイオラに向ひ旁白」 仲裁談はとう／＼纏まりませぬ。武士たるもの、手前、一坦立てた誓詞に對して是非に及ばぬと申すのでナ。尤も此決闘の基源については、篤と熟考の上、格別の根も葉もなきことが相分り申した。依てたゞ先刻の誓詞の履行までに申譯の抜刀を致すまで、別に貴殿にお怪我はさせぬと申すことと。

ウイオ 「旁白」 かくある上はたゞ神だのみ。些細の事にもすぐにこの身の本性は露顯するに相違ない。

フアビ 「ウイオラに向ひ」 餘り先方が猛烈ぢやツたら、降参するが宜しうムる。

ト一ビ 「アンドロリアに向ひ」 さア、アンドロリア氏、いよく調停の途も無くなつた。先方は名譽上貴公と一回丈は是非試合ひを致すといふの



ぢや。決闘法の上から申しても、こればかりは止むを得ぬが、先方も名譽の紳士で又武士ぢや、疵丈はつけぬと誓はれる。いざ早く〜。

アンド その誓を守つてくれ〜ばよいが。

と抜刀す、

ヴィオ 「フアビアンに向ひ」 私は全く厭てならないのぢや。

と抜刀す、

アントーニオ登場

アント 「アンドリューに向ひ」 コレ〜少時その劔を鞘に收められい、若しこれなる御方に對し何ぞ御立腹の件がゑらるなら、拙者がその責を引き受ける。若し又貴所の方で無禮を加へたといふのなら、拙者が代つて喧嘩のお相手致す。

と抜劔しかける、

トービ 何んぢや！ 貴様は一體何者ぢや？

アント イヤ口頭では言ひきれねえが、憚り乍らこの御方の爲めならば、

水火の中でも飛び込む所思の男一疋。

トービ 汝が横槍を入れる氣なら、俺がその相手になつてやる。

と抜刀す、

フアビ モシ〜トービ様お待ちなされませ、役人衆が見えました。

トービ 「アントーニオに向ひ」 では後で又出直すとすから、その積りて居れ。

ヴィオ 「アンドリューに向ひ」 モシ萬望その劔をお藏ひなされませ。

アンド ハイ〜藏ひますとも、就いては貴下と御約束のあの品は、間違



なく進上致します。全く穏和しい馬で少しも荒ばれはしませぬ。

二人の役人登場

甲役 「アントーニオを指し乍ら」 確かにこの者に相違ない、早う細打て  
ッ。

乙役 神妙にせい、アントーニオ、お上の命によつて逮捕致すぞ。

アント これに迷惑至極、お人違ひでムリませうぞ。

甲役 アイヤ、黙れ、頭に船員の帽子こそ被つて居ぬとて、兼ねて見覺ある  
汝の面貌、さア、キリ／＼と引ッ立てい。當人に於ても見破られたのは  
萬々承知ぢや。

アント 是非に及びませぬ、繩にかゝります。『ヴィオラに向ひ』 これと申す  
も皆貴所の御後をお慕ひ申した爲めぢや。が、斯うなつては後の祭、そ

の責は拙者にあります。就ては、貴所様には甚だお氣の毒、さぞ御困り  
とは存じますが、先刻御預け申せし財布を、御渡しを願ひ度うムリま  
す。實は自分の身に降つて湧いたる災難よりも、貴所様に對して存分  
の御世話がなりましたぬのが、残念に存じます。イヤさう喫驚なされ  
ますナ、御心配をかける程の事ではムリませぬ。

乙役 さア立てい、立たぬか。

アント 「ヴィオラに向ひ」 何卒あの金子の幾分かを御渡しくださいませ。

ヴィオ 何の金子でムります？

とヴィオラは一向睨に落ちぬこなし、

尤も只今の御親切もあること、又當座の難儀も甚だ氣の毒に思はる  
ゝほどに、足らぬ勝の懐中ながら、幾千か御用立は致しませう。持合は



せはほんのこれしきが兎も角も分けてあげる。さアこれが所持の金子の半額でム。

アント それでは拙者を見殺しになさる氣か。かくまでに御世話を致してあげたに、すげない返事をなさるお所思か。この不幸な拙者をば、尙ほこの上意地目ようとは餘ンまりてムりますぞ。今迄盡せし親切の行きが、り上ツイ心ならずも怨みの一ツも言ひたくなりませ。

ウイオ これは不思議なことをきくもの、私は卿と遇つたことなどは一度もない、私は忘恩者を何より憎みます、嘘、高慢、大酒家の管、その他いかなる悪徳よりもこの罪惡ほど憎いものはないと思ふて居る。

アント オヤ、重寶の口ぢやこと！

と相手の空々しさに呆るゝ面持、

乙役 コラ立てい、立ていといふに！

アント モ少し拙者に言はせて載きます、皆様も御覽の此若者を何者ぢやと思召めす、拙者のお蔭で死の虎口をのがれ、つゞいて受けたるしんみの介抱——あゝこの立派な尊さうな顔に欺されて、拙者は心から敬つて居たのでムります。

甲役 コラ、／＼、那麼ナ事には用事がない時刻が經つ、立てい！

アント それにしても、恁麼ナ買ひかぶりのまやかし物が滅多にムりませうか、モシ、セバスタアンさま卿はその奇麗な顔に泥を塗りましたぞ、善うムるか、心の腐敗が、それが本當の世の疵物、不人情な奴が、それが本當の人間の不具者、心の善いものに醜いものなしぢや、之に反して顔の奇麗な惡黨は、錦で包む糞尿の袋、鼻特がなりはせぬ。



甲役 這奴氣が狂ひかけて居る、早う引き立てい、早う〜。

アント 参りますよ。

と役人どもと共に退場

ワイオラ深く考へ乍ら獨語のやうにいふ、

ワイオ あの前葉は、心底から絞り出せる誠實の言葉、深く心に思ひつめて居る様子ぢやが、自分には腑に落ち兼ねる。それにしてもこれが事實で——兄と見違ひられたのが、全くの事實であつてくれればよいが……。

トロービ、今迄の二人の眞面目な問答を片腹痛く思ひ、嘲弄的に、

トロービ オイ〜アンドロリュイ氏、オイ、ファビアン、俺達も一ツ負けずに名付知識の向ふを張つて、お難有い説法でも并べやうか。

ワイオラ尙ほ獨り思案に暮れる體、

ワイオ 確かにあの人は此身を捕へてセバスタアンと呼んだ。鏡に映るこの姿を見れば、生きたる兄に面のあたり出會ふやう、ホーンに寸分違はぬは、われ等兄妹の面貌、しかも衣服の好み、裝飾までも、そっくりその儘のこの眞似様、あゝ幸に暴風雨に慈悲が宿り、碎ける波浪に人情が籠つて居てくれれば辱いが……。

と退場

トロービ イヤハヤ、狡い、安ッほい小僧ぢやないか、その癡、兎のやうな臆病と来て居やがる。その狡さ加減は、恩人の困つて居るのを平氣で見て、素氣なく拒ねつけたので分る。又その臆病なのは、ファビアンがよく承知ぢや。



フアビ イヤ臆病も臆病も、まるで臆病神の配下のやうな奴ぢや。

アンド 畜生、それなら追ひかけて行つて一ツ、ウンと撲りつけてやる。

トービ それが良い。思ひ切つて撲つてやれ！尤も腰の刀は抜かぬがよ

い。

アンド 若しこの拙者が……

と一散走りに退場

フアビ さア什麼なるか見物しやう。

トービ ナニ、どうせ大したものになりはしないさ。

と兩人退場

### 第四幕

#### 第一場 オリヴィア姫邸前の街頭

筋 茶坊主セバスタアンを認めて之をセサリオと誤認す、アンド  
リユー及びトービも同様の誤解をなす、かくてアンドリユー之に格闘  
を挑み、散々の目に逢はさる、やがてオリヴィア來り、同じくセバスタ  
アンをセサリオと思ひ、邸に入れとす、む、セバスタアン事の意外  
に驚きつゝも命に従ふ、

セバスタアン及び茶坊主登場

茶 それでは、ソノ拙者が貴所様を人違ひして居ると被仰るので？

セバ コラ、煩い、汝は餘程とぼけ者ぢや、モ一邪魔をして呉れるな。



茶 イヤ旦那は恍けるのが甘いものぢや宜しうムります、拙者は旦那と見ず知らずの間柄でムりませう、又拙者は姫君の仰せを受けて旦那の所へわざ／＼呼びに参つたのでもムりますまい、又旦那のお名前もセサリオでなく、それからこの鼻も拙者の鼻ではムりますまい、見るもの聞くもの皆反對でムりませう。

セバ オイ／＼拜むから貴公、無駄口は他へ行つて叩いて呉れよ、何んて貴公などに面識があるものか。

茶 無駄口は他へ行つて叩けてムる！

と茶坊主呆れ顔にて獨照

先生何所かて恁麼ナ文句を聞き嚙つて来て、早速それを通用してムるのぢやナ、無駄口は他へ行つて叩け！イヤ畏れ入つた、この搥梅で

行けば、世の中が直にさいた風の人間で埋もれて了うに相違ない。――旦那も願ひてムります、那麼ナよそ／＼しい思はせ振りは早く廢めにして、何と姫君に御返事を叩いてよいか、被仰つていたゞきます。早速御光來になると叩いて宜しうムりますか。

セバ コレ／＼唐變木どの、宜い加減に廢してくれ、ソレ小遣をやるぞ、この上もツと愚圖々々して居ると、只では置かぬぞ。

茶 イヤ旦那毎度どうも難有うムります。茶坊主にお金子をくださる方は、後日必らずその報酬がきて、名聲があがります。

アンドリユー登場

アンド ヤイ、又とう／＼めぐり遇つたのは運の盡覽悟シアがれ。

とセバステアアンに打ちかゝる、セバステアアンも躍起となりて駆け





し！ぬう！ぬう！だのるすを何！バセ

さまにアンドリーを撲りつ  
け乍ら、

セバ 何をするのだ！奴！  
この邊の奴は皆氣が狂つ  
て居る。

といひ乍ら板敷しかしる、

トービ及びフアビアン登場

トービ コラ待て！待たぬと汝の  
刀をもぎ取つて三里も先きへ  
投り出すぞ。

茶 こりア早速姫君に御注進々

々、この仲間入りは眞平ぢや。

と退場

トービ尙ほセバステアンを引き留め乍ら、

トービ オイ、コレ待てといふに！  
アンド ナニ恠麼ナ奴は構はぬが宜であります。これから一ツ手段をか  
へて意地目でやります。苟くもこの國の法典が備はつて居るなら、私  
は毆打罪に問ふてやるのであります。最初手出しをしたのは私であ  
ります。が、ナニ少しも構へませぬ。

セバ コラ手を離さぬか。

トービ イヤ、ナカ！この手は離されない。先づその利刃を元の鞘に收  
めて了へ。どうも貴公は人でも食ひたさうな眼光の男ぢや、さア一所



に來い！

セバ 先づこの手を離して貰ひますよ。

とトービを突き放し、

全体貴公は拙者に何の用事があるのぢや。この上尙ほ邪魔をすると  
いふなら、これで來い！

と抜劍す、

トービ 何……何んぢや！よし／＼、それでは貴公の身体から少しばかり  
悪血を抜き取つてやらさばなるまい。

と續いて抜劍す、

オリヴァア登場

オリヴァ コレ待ちあれ、トービ、待たぬと承知しませぬぞ。

トービ これは御無理な！

オリヴァ 又してもこの性懲りもない、やくざもの奴が！汝などは深山の  
奥の窟の裡に無禮講の蕙でも張るべき人柄、目通りすること相成ら  
ぬ！——モン、セサリオぬし、萬望御氣にとめてはくだされますナ！  
——不屈者、まだ退らぬか！

と又トービを叱りつく、トービ、フアビアン、アンドリニー  
何れも退場

只今の理不盡な仕打には、さぞ御立腹でもムりませうが、そこは何卒  
御分別なされていたゞき度うムります。さア此方へ御入りくだされ  
ませ、彼の悪戯者がこれまでの失策話をさき／＼になれば、只今の事も  
必然常座の御笑草、さッぱり水に流してくださるに相違ない。アレこ



のまゝお歸し申すことはなりませぬ。おとなしくいふ事をさし遊ばせ。折角大事の人に氣を揉ませて、何と憎い不届者でムりませう。

セバ ステファン事の意外に驚き感ふこなし。

セバ 「旁白」 さて、これは何たる風の吹き廻し、何が何やら一切方角とても分り兼ねる。自分は氣でも狂ふたか、たゞしは夢でも見て居ることか。イヤ生涯正氣にはならんでも苦しうない、慥麼ナ夢を見て居るなら何時までも眼を覺まさずに居たいものぢや。

オリヅ さアお出て遊ばせいな、妾のいふ事をアノさくのはお厭でムりますか。

セバ イヤ、それでは仰せに従ひます。

オリヅ あゝさうなければならぬ筈、屹度でムりますぞ。

と退場

### 第二場 オリヅィア姫邸内の一と間

筋 家令マルヴォーリオ狂人として暗室に檻禁せらるゝや、茶坊主其室の前に行き、最初は僧侶の假聲をつかひ、後には自分の聲に戻りて、さまざまに翻弄す、終にマルヴォーリオに依まれて、オリヅィア姫に辯解の手紙を送ることとなる(この手紙は第五幕に至りて姫の手に渡され、マルヴォーリオの行爲初めて明白となる)。

侍女マリア及び茶坊主登場

マリア まア妾のいふことをきいて、此法衣をきて、そしてこの假聲を附けるのぢや。そしてトーバス(僧の名さまと思はせてやるのぢや。大急ぎに願ひますよ。その間に妾が行つてトービ様をお召び申して來ま



す。

と退場

茶 よしくそれなら之を着て、すつかりトバス上人に化けてやる。坊さまの身代りなどは、開闢以來先づ前例があるまいと思ふが、若し無ければ難有いぞ。

言ひ乍ら法衣と髻を附ける。

たゞお生憎様なことには、拙者は、坊様にしてはチト肥り方が足りない。いざればと言つて學者と見られるには、チト痩せ方が足りない——ヤ同志の面々の御出でぢや。

トービ及びマリア登場

トービ これは上人様何時も御息災で重疊に存じまする。

茶坊主早速トバスの假聲になり、

茶 ホホト、トービどの、誠に今日は麗かな天氣でムるナ

トービ それでは早速乍ら上人様宜しくお願ひ申しまする。

茶坊主假聲にて暗室内のマルツァーリオに向ひ、

茶 コレ、奥の人いかゞ致してムるナ。家内安全、暗闇安全。

トービ 「マリアに向ひ旁白」 彼奴中々甘くやりある、感心な奴ぢや。

マルツァーリオ 「暗室内にて」 モシ拙者をお呼びなされるは何誰でムるナ？

茶 住職のトバスぢやよ、發狂人マルツァーリオを御見舞の爲めにわ

び、〜節をまげました。

マルツァーリオ コレ、トバスさま、お願ひでムる、トバス様、姫君の所へ行つてくだされませ。



茶 エーおのれ、法螺吹きの悪魔奴！汝は何所までマルツォーリオに崇  
るのぢや、口を開けば直に女子のことはかり申しおる。

トービ これは上人さま、御尤もてムります。

マルツ コレ、トーバス様、拙者のやうに無實の罪を被せられたものはム  
りませぬ。トーバス様、夢にも拙者を狂人と思ふてくだされませぬ。拙  
者は悪漢の爲めに、慥麼ナ暗闇などに入れられて居りますので。

茶 え、この嘘つきの悪魔奴が！愚老はこれでも職掌柄、穩な言葉で  
申しさかせて居るのぢやぞ。汝はこの室が暗いなど、申しおるか。

マルツ 暗いので暗くないの、まるで地獄のやうで。

茶 何んぢやと？張出し窓が壁のやうに透り、南北に開いた上の半部  
が黒檀のやうに明るいのに、何を申すのぢや、暗いもあるものか、この

不届者奴が！

マルツ コレ、トーバス様、拙者は狂人ではムりませぬ、全く以てこの室は  
暗いのであります。

茶 コラ、狂人、嘘をつけ！心の闇の外に天下に闇はないものぢや、  
汝の心が暗い故、その爲めに汝は今狭霧の裡に鎖されて居る。

マルツ それでも、全く以てこの室の暗さは、心の闇にも地獄にも劣つた  
ものではムりませぬ、全く以て拙者ほど冤罪を受けて居るものない  
のであります。拙者が狂人なら、貴所も狂人てムります。何か質問をか  
けて、試して見てくだされませ。

茶 然らば質問致すが、ピタゴラスは雁に就きていかなる説を抱いた  
？



マルツ 吾々の祖母の靈魂が或は鳥に宿るかも知れぬと申しました。

茶 汝はその學説をいかゞ思考致す？

マルツ 拙者は靈魂を尊いものと思ひます故にこの學説には不賛成で。

茶 歌目ぢや〜俺はモ一歸る。汝は暗闇の中に靜かに座つて居らッ

しやい。汝かピタゴラスの學説に服従し、一羽の山鵝を見ても若しや

祖母の靈魂が之に宿つて居はせぬかと危むやうに相成るまでは精

神に異常がないものとは認めてつかはす事相成らぬ。

マルツ コレ、ト一バス様！ト一バス様！

ト一ビ これは實に見上げたト一バス上人様ぢや。

茶 イヤ拙者などは、何をやつても先づ恁麼ナものさ。

と大得意、

マリヤ 卿は髭も法衣も着ずとも可かつたのぢや。先方では何うせ卿が見えるぢやなし……

ト一ビ 今度は一ツ自分の聲言で話をして、什麼な鹽梅か見届けて來て呉れ。モ一そろ〜惡戯もこの邊で千秋樂を告げるとしやう。甘い具合に牢から彼奴を出すことが出來れば、さうしたものぢや。俺も餘程姪どのの感情を害して居るから、餘り何所までもやつて居ると此方の軀が危くなつて來る。兎も角も自室まで引きあげやう。

とト一ビ、マリヤ兩人退場

茶 [歌ふ]

「モシ、ロビン、善い子のロビン、

様子は什麼ぢや、姫さまの。」



マルツ コレ、茶坊主！

と大聲に呼ぶ、

茶 「歌よ」 姫さまは劍もほろゝに。」

マルツ コレ、茶坊主！

茶 「歌よ」 あゝなさけなや、なぜさうかしら。」

マルツ コレ茶坊主！茶坊主といふに！

茶 「歌よ」 外にあります、可愛い方が。」

急に氣がつきたる氣味にて

何誰どなたてムる、御呼よびびの方は？

マルツ コレ、茶坊主どの、卿おさまは日頃よう俺のいふことをきいて呉れるが、  
蠟燭とそれからペン、インキ、それに紙を添へて持つて來て呉れまい

か。その内必らず立派なお禮をするよ。

茶 モシ、マルツ、ガ、イ、リ、オ、様。

マルツ 何ぢやよ。

茶 貴所あなたさま様は什麼なにしてまア狂人きやうじんなどになつたのでムります。

マルツ コレ、茶坊主、俺のやうに慘酷な目に逢はされたものはないぞ。俺  
は狂人きやうじんではない。些ちしも卿達おさまたちと變つたことはない。

茶 拙者てまへ達と變つたことはない？ それでは確かに貴所は狂人に相違  
ない。拙者のやうな莫迦ばかと同じでは……

マルツ 實に奴やつどもの仕打しうちは言語同斷、人を荷物扱ひにして暗室などに  
入れ、その上坊主などを寄越よこして説法させる！寄つてたかつて人に  
赤耻あかぢを搔かかせる氣ぢや。



茶 コレ／＼無<sup>か</sup>聞<sup>な</sup>なことを言はッしやるナ、上人さまが爰に御座らッしやる。

急にトীবス上人の聲になり、

マルツォーリオ／＼神の力で汝を早う正氣に戻らせたいものぢや精出して成るべく眠るがよい、たあいもない嘸語<sup>なごご</sup>などは言はぬことぢや。

マルツ モシ、トীবス様。

茶 コレ／＼卿はこの男と言語<sup>ことば</sup>を交へては相成らぬぞ。

急に自分の聲になり、

ハイ／＼拙者<sup>てまへ</sup>でムりますか、畏<sup>かしこ</sup>りました、これは上人様、お歸りてムりますか、お静かに。

トীবスの聲にて

宜しいかナ?

自分の聲にて

畏<sup>かしこ</sup>りましたムります、ハイ／＼。

マルツ コレ、茶坊主、茶坊主といふに!

茶 これは性急<sup>せいかち</sup>ナ!一體何の御用でムります? 拙者<sup>てまへ</sup>は只今貴所<sup>あなた</sup>と會話<sup>はな</sup>をしたので叱<sup>な</sup>られて了<sup>しま</sup>しました。

マルツ 兎も角も燭火<sup>あかり</sup>と紙とを貸して呉れ、拙者が狂人ならイリ、ア國中の人間は皆狂人ぢや。

茶 若しさうあつてくだされば誠に何よりの仕合せてムるが。

マルツ それは神明に誓ふても確かぢや、兎も角も、インキと紙とそれか



ら燭火ぢや。そして拙者の書いたものを姫君に差上げるのぢや、それに對しては開闢以來前例のない程の骨折賃をつかはすぞ。

茶 それでは御手傳を致しませうが、正眞懸値無しの所を被仰つていたゞきます、貴所は實際狂人ではムりませぬか、それともたゞ正氣の振をして居るので？

マルツ 全くぢや、拙者は狂人ではない、決してそれに相違ない。

茶 イヤ狂人ばかりは何うも脳味噌を検査した上でなければ信用は出来ませんナ、兎も角も燭火と紙とそれからインキを持つて上りませう。

マルツ コレ、茶坊主、さうしてくれ、ば御禮は存分にしてやるぞ、さア早う。

茶 [歌と]

然らばまゐらう

急いでまゐらふ、

やがて戻らう、

まばたきする間に、

鬼をいぢめる悪玉そのまゝ、

存分おぬしをせしめてやらう。

打ち振る木刀水車、

腹立まぎれの大音聲、

やア、赤鬼よツクきは、

汝の爪は長過ぎる、



それ／＼切つてつかはずぞ、

おツとよし／＼此お人よし。

と退場

### 第三場 オリヅィア姫邸の園内

筋 〱 セバスタアンは極めて唐突至極なるオリヅィア姫の振舞に驚き怪み且つ疑ひ居る其所へ姫は一人の僧を連れて入り来り、即刻婚約をせよと迫る、セバスタアン益々仰天しつゝも、かゝる美人よりの申込なれば、恐るゝ氣持もせず、終にその意に従ふ、

セバスタアン登場

セバ これは確かに空気がしこにきらめくはたしかに日輪、又贈り物の此指輪は確かに指にも觸り眼にも見える、不思議といへば不思議な

れど、氣が狂ふて居るものとも見えぬ。それにしても、アントーニオは何所へ行つたやら、エレフエント亭にも居らぬ。尤も旅宿に顔出しはした様子ぢやが、拙者を搜索の爲めに市内を歩き廻はつて居るらしいとの宿の者の推量若しあのアントーニオさへ居て呉れれば、さしあたり善い相談相手になるのぢやのに、いかに自分の心が自分の眼と押問答、これはたしかに何かの間違、發狂ではないと、決めたところで、餘りといへば突飛の幸運、古今に類なき變妙不可思議、何うやらこの眼が不信用、又自分と姫とを成るべく狂人でなくしやうと頻りに急せるこの心にも、徹頭徹尾信用は致し兼ねる。さればと申して若しこの姫が眞實狂人でありとせば、かほどの家を治め、かほどの従者を指圖して何の落度もなく、圓滿に細心に飽まで確乎とした振舞をなし





「お仰せに従ひお伴を致しませぬか」

得やうとは、これも又思はれぬ。して見れば、これには何うしても腑に落ち兼ねる個所がある——が、姫の姿が見えたやうぢや。

オリヴァア 姫牧師と共に登場

オリヴァ モシ、妾が性急ぢやとて叱つてはくだされますナ。貴所さまの御思召さへ確かなら、これからすぐに、これなる牧師と御一所にほとり近き

禮拜堂に赴き、神の御前に於て千代かけて變らぬ結繩の契りを固めて戴き、この胸に蟠る苦勞の雲も疑惑の蔭も、一時に晴らさせて貰ひたう存じます。天下晴れての披露發表は、貴所さまに御都合のよき時まで、是非牧師どのにお依み致して、繰り延べることに致します。この儀さへ入れてはくだされませぬか。

セバ 仰せに従ひ御隨伴を致します。一坦誓詞を立てたる上は行末かけて破ることは萬々ムりませぬ。

オリヴァ それなら上人、御案内を願ひます。ぞ。

と一同退場



### 第五幕

#### 第一場 オリヴィア姫邸前の街頭

筋——これまで築きあげたる趣向葛藤段に至りて全然解決す、先づ形貌の生き寫しなるヴィオラ、セバスタアン兄妹が篇中の主要なる人物の前にて合合するの一事はすべて難問を氷解す、オリヴィア姫はセサリオと思ひの外セバスタアンと婚約を結べるを發見したれど、勿論この交換には不平を起すの理山なく、又オルシノ公爵はオリヴィア姫と結婚し難きを見るや、直にその愛情をヴィオラに移してクロリとなる、家令マルヴォーリオが機室より贈れる手紙は、オリヴィア姫の手に渡りて初めてその無實を明かにし、トービの悪戯者は又マリアの悪戯女に結婚するなど、目出度しといはゞ目出度か

ける次第なりけり。

茶坊主及びフアビアン登場

フアビ オイ、朋達、甲斐に、その手紙を見せて呉れ、

茶 フアビアンさん、俺の方にも一ツ御願がムる。

フアビ お安いことで。

茶 では、御願ひだから、この手紙を見度いと言ふて呉れるナ。

フアビ ナンの事だ、まるで犬を一疋人に與れておいて、その返禮に今の犬を貰ひたいといふと同じぢや。

オルシノ公爵、ヴィオラ、キネリオ、及び従者登場

公 コレ、汝達はオリヴィア姫の家來衆ぢやナ。

茶 御意にムります、餘程ソノ安ッぽい方の家來衆で……



公 余は善う汝を存じて居るぞ、近頃は什麼ナ塩梅ぢやナ?

茶 仇敵の爲めには得ばかり取り、味方の爲めには損ばかり致して居ります。

公 それでは全然反對ぢや、味方の爲めに得を取るのぢやらう。

茶 イヤ矢張り損を致して居りますので。

公 それは又什麼いふ次第ぢや。

茶 さればでムります、味方のものは拙者を讃めますので、ツイ増長して了ふやうな譯然るに仇敵の方は、拙者のことを判然と莫迦ぢやと被仰ツてくだされます、されば仇敵のお蔭を以て反省心とやらを起して大に得を取るに反して、味方の爲めには、散々の迷惑を受けて居ります。

公 イヤこれは名言ぢや。

茶 什麼仕りまして、名言どころでは——折角の御味方ではムりまするが。

公 アイヤ拙者は味方は致しても損はかけぬぞ、さアこれをつかはす。

と金貨一枚を興ふ、

茶 エー殿様二枚舌は悪るいといひますが、二枚戴いて悪るくないものもムります。

公 コレ、汝は悪い事を余に勧めるぞ。

茶 悪いことはしばらく水に流して了ひ、泰然として御手を懐にお入れなされますやう願ひ度うムります、すると自然ガチリと御手に觸るものがムります。



公 致し方ない、それでは二枚舌の罪を犯すと致さう、ソレモ一枚遣はずぞ。

と更に一枚を興ふ、

茶 エー殿様、兎角物事は三ツに限りませう、骨牌をやりましても、昔から三度目には前の二回分を取りかへすといひます。舞踏には三ツ調子がよく、寺院の鐘は三拍子、一二三とつゞけて鳴ります。

公 イヤ今度はモ、金子は取られないぞ、若し汝が姫君に余の参上した旨を告げ、首尾克愛までも連れ申してまゐるなら、その時又改めて慈善心を喚び起すと致さう。

茶 では拙者が戻るまで、その慈善心を臥かして置いて戴きたら、ムリです、早速行つてまゐります。尤も、拙者を慾張りの錢欲しがりと思召

めされては困ります、只今仰せの通り、慈善心がお寝みと申すことゆゑ、拙者がそのお目の覺まし役にならうと思ひますまで。

と退場

ウイオ アレ、小臣の難儀を救ふて呉れし、當人が見えましてムリです。

アントーニオ及び捕吏登場

公 ヤ、その顔は兼ねてよう見覺えて居るが、たゞ以前見た時は、火藥の爲めに一面の黒燻し、さながら鍛冶屋の神かと疑はるゝばかりぢや、折から彼の指揮せしは、木の葉の如き破小船、吃水淺く、容積も言ふに足らざる程のものなりしが、之をしも事ともせず、味方の艦艦に對抗ひて、世にも目覺しき健闘力戰、その働振りには、遺恨骨髄に徹す



るものまでが、威歎の聲を放たずには居られなかつた。——シテ今回の捕縛の次第は？

甲 役 申上げまする、この者こそ、かのアントーニオと呼ばれる、水夫にて、即ちカンディより歸航中のフエーニックス號及びその船貨を分捕致したる不敵の曲者、又かのタイガア號に亂入してタイタス様（公爵の甥）に片脚を失はせせしも同じく此人物にムりまする。かゝる身の程をも憚らず、本日街頭に於て私事を以て争ひ居りましたにより、難なく搦め取つて參上致しましてムります。

ヴィオ イヤ此方は、私に對している、親切をつくし、そして私の助太刀を致したものにムります。たゞ最後に何やら腑に落ち兼ねる事を申しました、それは多分發狂の所爲とより思はれませぬ。

公 こりア海賊、この附近一帯は皆汝の非理の行爲を怨む仇敵の土地ぢや、何とてかくは恐かにも亦厚釜しくのさばり出て、おめくくと捕虜の身とはなつたのぢや。

アント 御無禮乍ら公爵、只今御仰せの海賊の汚名は、拙者慰斗をつけて御返却仕ります。アントーニオが公爵の不倶戴天の仇であることは萬々認めますれど、海賊は營みませぬぞ、さてこの拙者が當地に參りましたは皆狐奴がさせし業、と申すは公爵の御側に立つて居る、その忘恩の少年奴にムります。實はたけり狂へる荒海の濤の中より彼を救ひあげたるは拙者の微力、若し拙者さへ救はずば、とても助からぬ捨小舟、かく生命の親である上に、その後も慾得を離れての保護介抱、及ぶかぎりの世話はしたつもり、これと申すも只その人をいとし



む餘り、いとしいばかりに、かゝる敵地にも身をさらし、又彼が敵に取り  
り圍まれたと見し時は、抜刀の上味方もした。然るにその場に於て、一  
坦拙者が役人の手に捕縛されたと見ると、心きたなくも掌をかへす  
驟かの變心、たゞ當座の難儀をのがれたさの一念に、この拙者をば袖  
にして、一たび瞬きするかせぬ間に、二十年も飛び離れたる恍惚様そ  
して僅か半刻以前に貸し與へし拙者の財布を受取つた覺えがない  
と言ひ張つたのでムります。

ワイオ 一体これは什麼した譯かしら。

と不審晴れぬ面持

公 シテ當市へ參つたのは何時なのぢや？

アント 本日のことでムりまする、一体この三月が間、二人はたゞ一刻の

間も、一所に居らぬ事はムりませぬ。

オリヴィア 姫及びその従者登場

公 おゝ、姫の御光來、さながら天女の天降りする姿ぢや——

アントーニオ を願みて

今申した汝の一言一句は悉く囁語ばかりぢやぞ。この若者が余に仕  
へてより、已に三月ぢや。詳しいことは追つてきかせる。物ども、少時彼  
奴を退がらしめい！

オリウ 公符には御用もあらば何なりと仰せられますやうに、妾の力に  
及ばぬことはたゞ一個しか御座りませぬ。

ワイオラ に向ひ、やゝ不快の面持にて

セサリオ ぬし、それではアノ約束に違ふではムりませぬか。



ウイオ アノ何のことでムりますか？

と意外の面持、

公 モシ、オリヴァア姫——

と公爵は何事かを言はんとす、オリヴァアはそれに頓着せず、

オリヴァ セサリオぬし、御返事を伺ひませう。——公爵にはしばし御待ちのほどを……

ウイオ 公爵様には何ぞ御話しがムります御様子、私は御遠慮申します。

オリヴァ 又例のお話ならば公爵、耳に紙が出来ましたわいな。モ一澤山にムります。

公 何時にかはらぬその愛相づかし。

オリヴァ ハイ不相變でムります。

公 不相變剛情ぢやと言はるゝかえ、義理もなく利益もない、この無用の祠ほこらにあたら赤心をさしげて祈願を籠めし腑甲斐なさ！何としてくれやう。

オリヴァ 何なりとも御存分のことをなされませ、御身分にかゝはらぬ程に。

公 イヤこの方ぢやとて一坦決心の臍はらを固むれば、愛する人を一刀に斬り殺す位のこととは致し兼ねぬ。あながちこれも悪くはなき復讐法、場合によりては潔よう見えもするが、余はさうはせぬ。余は卿が折角のこの誠意を塵芥ちりくたと排斥し、そして他し男に情思を寄せ居る次第を存じて居る。その片意地はあくまでも通させてつかはすが、たゞこの若者ぢや——卿も愛し、又余もいとしむこのセサリオ、之を卿の眼か



ら長へに引き離して呉れる。いざ、セサリオ随伴致せ、斯うなつては自分の悪戯を仕盡してくれ。菩薩顔の夜叉どのを膺懲の爲めに可愛い小羊の一疋位は犠牲として惜しうはない。

ウイオ 公爵さまの御胸のすきまずやう、生かすなり、殺すなり、如何やうにもなされませ。

と公爵の後に續く、オリヴァア引きとめる、

オリヴァ コレ、セサリオどの、何所に行かるゝのぢやいな？

ウイオ 生命よりも何よりも大事の公爵様の後についてまゐるのでムリます、最愛の妻とても公爵さまにはかへられませぬ。若し私の言葉に露許りがあるなら、御空の神も照覧あれ、その爲めに生命を奪はるゝも悔みはせぬ。

オリヴァ くやしい〜！ようもわが身を騙しましたナ！

ウイオ 何人が貴嬢を騙しました、何人が貴嬢に不義理をしました？

オリヴァ アレあの顔の空々しい！これが忘れられるほど遠い往時のことかいな？ちよと牧師を召んで参れ。

と従者の一人急ぎ退場

公 [ウイオラに向ひ] 此ら早う参るのぢや。

オリヴァ 何れへ参れと被仰る？わが良人、セサリオどの、お待ちなされ。

公 ナニ、良人ぢや？

オリヴァ 立派に良人てムります、今更良人でないとは言はせませぬ。

公 コレ〜それが事實か？

ウイオ イヤ決して左様の覚えはムりませぬ。



オリガ え、腑甲斐なきその言葉、臆病風に自己の人格をも棄てる氣か！コレ、セサリオどの、今更何所に臆する事がムります。身についた幸運なら何故拾はぬ、潔よう名告りあぐれば、卿の憚るその人に寸分たりとも劣る身分ではムりませぬぞ。

牧師登場

あゝ上人ようお光來なされました。先刻は當分の内は内密にしておくことに決められたれど、最早それを待つては居られませぬ。貴所の御職分に誓ひて、先刻これなる若者と妾との間にいかなる契約がとり結ばれたか、ありのまゝに被仰つていただきます。

牧 立派に赤繩の契を結びましてムります。握り合ふた互の手、つけ合ふた互の唇、とりかはしたる紀念の指輪——すべて結婚の大禮は、牧

師の職を激せる拙者の面前に於て、首尾克舉行されました。ムります。この時計の針の示す所によれば、それから、やツと二時間ほど経ちましたに過ぎませぬ。

公爵ヴィオラを順みて怒氣を含み、

公 え、己れ嘔吐きの二才奴！汝如きものが、やがて頭に白髪しらかみの混る年輩としよびともならば、いかに墮落することぢやらう。イヤ、その時期に達せずして、われとわが張る係蹄わなにかゝり、早くも身の破滅をば招ぐてあらう。モ、これでおさらばぢや、好いた女に連添ふがよいが、モ、二度と余の面前に顔を出すことは相成らぬぞ。

ヴィオ 公爵さま、御言葉ではムりますけれど——

オリガ アレモ、何も言ふてたもるナ、この上の恥曝はなはだしは御無用にムる



わいナ。

アンドリー 腦天を割られて登場

アンド 大變く 醫者ぢやく！ トービさんにも是非一人……

オリサ いかに致したのぢや？

アンド 彼奴の爲めに頭を空竹割にされたので、トービさんも血達磨になつて居ります。萬望御助けく！ 恁麼ナ事なら、縦令百兩が千兩でも、自宅にくすぶつて居ればよかつた。

オリサ 何人にもその様な目に逢はされましたのぢや？

アンド 公爵の小姓のセサリオと申す男で、實は私どもは餘程の臆病者と見絞つて居りました所、中々夜叉鬼神の再來かと思はるゝ程の手腕で……

公 ナニ、余の小姓のセサリオ？

アンド ヤ大變、爰に来て居たナ！ コレ卿はよくもとがない拙者の腦天を割りましたナ！ 幾らか自分も手出しはしたが、それはトービさんから煽動られたのぢや。

サイオ コレく 何故左様の事を私に申すのぢや。私は卿に疵などつけし覺えはありません。貴所こそ何の理由もなきに、抜刀を以て私に向ふて來ました。其時でさへ私は穩便の答をして、怪我などさせずに濟んだ。

アンド それでも血だらけの腦天が何よりの證據ぢや。人の腦天を割つて置いて、それで平氣で居るとは、狡いのでありますぞ。

腦天を割られたるトービ及び茶坊主登場



ソレ、トービさんが跋を引いてムられた。詳しい事は追々分ることぢや。尤も彼のトービさんが若し酒にても酔ふて居なかつたら、卿など



及び茶坊主登場 天割らたれらるトービ

公

は酷い  
目に逢  
ふ所ぢ  
つた。  
コレ  
ト  
トービ

の、いかゞ致した？

トービ いかゞ致したつて別に仕方がない。怪我を致してそれでオヂャン

—— オイ、コラー！坊主、醫者ッぽは居ないか。

茶 イヤ、トービ様、醫者どのは先刻大變酔ふて居ました。朝の八時と申すに、眼球がすはッてナ。

トービ 畜生、仕やうがない奴ぢや、九ッぢや！泥酔者には拙者偏に降參致す。

オリッ 早う彼を退らせい！全體このやうな怪我は誰がさせたのぢや。ア、トービ様、介抱は拙者がしてあげる。拙者も一所に縋帶して貰ひますでナ。

トービ 貴公が介抱して呉れる？笑はせるぜ！莫迦、生意氣、碌でなし、お負けに幽霊そツちのけの骸骨面の鈍物のくせに。

オリッ 早う寢室につれて行つて、疵の看護をしてつかはせ。



と茶坊主、フアビアン、ト、ビ、アンドリニー一同退場

セバスタアン登場

一同セバスタアンの姿を見て驚くこなし

セバ 姫捕者は御親戚のものを傷けて甚だ恐縮にムります。尤も縦令骨肉の間柄でも自衛上矢張り疵位はつけたに相違ない——イヤ貴嬢は餘程御不興の御様子、察する所拙者の行爲が、お氣にさはつたのでムりませう何卒先刻の固き誓約に免じて、大目に見ていたゞきたいもので。

公爵はサイオウ、セバスタアンの兩人を指し乍ら、

公 ヤ、一ツ顔、一ツ聲、一ツ衣服で赫軀丈が二個、幻影にして而かも又幻影にあらず！

セバ コレ卿はアントーニオか！イヤ、よくも無事で居つてくれました！卿が居らずなつてから、拙者の苦勞心配は一と通りではなかつたぞ！

アント 貴所はセバスタアン様でムりますか？

セバ 當り前ではないか。

アント でも貴所は、什麼して恁麼ナ身代りを造りなすつたのでムります。

とサイオウを指しつゝ

よく爪二ツとは言ひますが、中々それ所ではムりませぬ何方がセバスタアン様で？

オリウ 恁麼ナ不思議が世にあらうか。



セバ ステファンもヴィオラを見て初めて驚き怪しむ。

セバ ハテ其所に立てるはこの身かしらぬ。自分には兄もなければ弟もない、又一時に二個所に現るゝ神術を身に具へて居るとも覺えぬ。尤も一人の妹がありはしたれど、無情の波に攫はれて、海底の藻屑となつて了うた。コレ、お願ひぢや、卿は拙者の何てムる？ 何れの國人で、何といふ名で、又何人の御子なのぢや？

ヴィオラ 出生地は、メッサリン、父の名はセバステファン——同じ名の兄ぢや人は、丁度貴所と生寫し、その通りの服装して波にさらはれて死にました。若し人の魂魄が、姿も服装も生前のまゝて現はれ得るものなら、貴所は兄の魂魄に違ひない。

セバ イヤ拙者の魂は母親譲りの肉体の中に包まれて居るから安心ぢ

や、兎にも角にも一々思ひ當たる話の模様、若し卿がたゞ女子であつてさへくれるなら、飛びついて、その顔にうれし涙を濺ぎかけて、兄妹の名告をするのぢやが……

ヴィオラ 私の父ぢやつた人は、額に黒子がムりました。

セバ 拙者の父とても同様ぢや。

ヴィオラ そしてヴィオラが生れて十三の時に歿られました。

セバ その時の有様はありくくと拙者の胸にも刻まれて居る。父は妹が十三になつた日に、この世の氣息を引きとられた。

ヴィオラ それでは、モ一妾が、この假の衣服を脱ぎさへすれば、めぐりあひたる兄妹の隔ての關はムりませぬ。アレマア待つてくだされませ、場所から時日から身の上の一伍一什まで、一々しかとした證據を擧げる



までは、しばらく抱き合ふだけは致しませう。妾の衣服が預けてあるこの市の船長の許までお出てください。されば萬事は直に分ります。妾を公爵さまに御奉公させたのもその方の御世話。それからと申すものは公爵様と姫君との間の使者の役、いろ／＼の目に逢ひましたわいな。

セバ 「オリヅリアに向ひ」 さすれば貴嬢は飛んだ人違をなされました。矢張女子は女子同志、自然氣心が合ふものと見えます。貴嬢は今すこしの所にて同性の少女と二世の契を結ばるる所ぢやつた。尤も人違にして人違にあらず、少女と二世を契ると同時に又男子とも二世を契られた。

公 アイヤ、オリヅリア姫、別に驚かるゝ事はない、同人は由結正しき人物

でゐる。イヤ併しながら若しこの兩人が眞の兄弟なりとせば、余もこの幸福なる難船の仲間入りをするにせう。

ウイオウラに向ひ

喃 コレ少年、卿は幾回となく余に向ひ、天下のいかなる女子にも余ほど愛を捧ぐべき者はないと申したナ?

ウイオ その事なら重ねて誓言致します。そして一坦口に誓つたことは朝に出て、夕に入る日輪の、寸分の差違もなう、立派に守る覺悟にムります。

公 こりア手をとらせい、それから寸時も早う少女の服裝をして見せ

ウイオ アノ妾の衣裳は、妾を救ひし船長の許にムります。が、同人は當家



の家令マルツォーリオどの、爲めに訴へられ、目下入牢の身となつて居ります。

オリウ それは早速出牢致させます、誰ぞマルツォーリオを呼んでまわれ——アレ、ホンに、マルツォーリオは發狂したのぢやつた、自己の事に氣を奪られ、人の事などは頓と打ち忘れて居りました。

茶坊主 手紙を携へて、フアビアンと共に登場

コレ、<sup>どん</sup>什麼ナ様子ぢや、マルツォーリオは？

茶 矢張ソノ狂人相應にやつて居ります、で、姫上にと申して、この手紙を渡しましてムります。實は今朝お渡し致すべき筈でムりましたが、元々狂人の手紙などは、格別難有くもない品、何時でも差支ないものと多寡をくゝつて居りました。

オリウ 開封して讀んでさかせい。

茶 東西！茶坊主の莫迦が、只今狂人の手紙を朗讀致します。よくよく御耳を濟まして、謹聽なされませう。——

〔腹一杯の大聲にて朗讀す〕「神明に誓ひて敢て言上す——」

オリウ コレ、<sup>ど</sup>汝は氣でも狂ひはせぬか？

茶 イヤ拙者は狂人の手紙を朗讀致しますので、中身に釣合つた讀み方をするには、是非大聲を致しませんでは……

オリウ たゞ眞面目に讀めばよいのぢや。

茶 エーモ、拙者は至極眞面目でムります。マルツォーリオの真相を發揮するには、是非この讀み方が肝腎でムる。いざ、篤と御清聽くださいませう。



オリッ ヲ「フアビアンに向ひ」 汝キミに申附けるぞ。

フアビ 「朗讀すること」神明に誓ひて敢て言上す、姫上にはいたく小生を誣辱されたり、このまゝ黙止すべきにあらず、姫上は小生を暗室の裡に投じ、かの酒亂の従弟をして、小生を壓服せしめられたり、されど小生が精神に異状なきは毫も姫上と異なることなし、小生をしてかの奇怪なる服装をなさしめしは、姫自身の書状のみ、若し右の書状を以て世間に問はゞ、小生の潔白は證明せられ、而して姫には必らず多大の耻辱を與へん、小生に對する毀譽褒貶の如きは願する所にあらず、今や自家の受けたる凌辱を辯ずるに急にして、言辭の不遜を願るに追あらず、 狂遇されたるマルツォーリオ百拜」

オリッ この書面はマルツォーリオが書いたものかいナ?

茶 左様にムリます。

公 これでは、餘り發狂とも思はれぬが。

オリッ フアビアン、汝キミが行つて牢より出し、そして爰に連れまわれ。

とフアビアン退場

公爵に向ひ、

さて公爵には、一應委細の事柄を薦と御熟考なされし上にて、妾をば義理の妹——妹にして同時に又人の妻と、御認めくださることはなりませぬか、さすれば一日の内に二た組の結納の儀式を、この場を去らす、當邸に於て舉行致したう存じて居ります。

公 それは願ふてもなき仕儀、歡んで御詞に従ひます、(ヴィオラに向ひ) 今より汝とは主従の關係を絶つてつかはす、見るからいたまし



い懺弱き身にて、骨身を惜まぬ口頃の勤勞、よう賤しき役目に服して  
くれたが、そのお禮には斯うしてつかはす、

と、ヴィオラの手を取り、

以後は余が借老の妻であるぞ、

オリウ コレ妹！妹と言はせてたもれいた、

と一同歎ふ、

フアビアン、マルツァーリオを連れて再登場

公 これが例の狂人なのぢやナ？

オリウ ハイこれにムリまする——コレく、マルツァーリオ、汝はいかゞ  
致したのぢや？

マルツァ 拙者は侮辱されました、古今未曾有の大侮辱を受けました。

オリウ 侮辱？誰も侮辱などはせぬわいな、

マルツァ イヤく左様ではムリませぬ、萬望この手紙を御一覽くださいませい、これが貴嬢の手蹟でないとは申されませぬぞ、若しお出来になるなら、手蹟なれ、文体なれ、これと相違したものを御製作りなされていたゞきます。この御自筆の姓名、この文句の組み立て方、いづれも御自分のものでないとは申されますまい。さていよく御自認なされまする上は、何故拙者に對して役にも立たぬ思はせ振りをなされましたか、何故拙者に命じて、ニヤく笑へとか、十文字の襪紐をつけいとか、黄染めの靴足袋を穿けいとか、それから又トイビどのその他に對して、權柄面をせいとか、被仰られましたか、シテ拙者が、之を眞に受けて、一々その通りの事を致せば、忽ち引ッ捕へて暗室の裡に禁鋼



三味、牧師などを遣はされて、智慧のあり丈、さまざまに嘲弄の限りを盡される。何の怨みあつての事か、充分御説明を願ひたい。

オリッ さて、マルツォーリオ、これは妾の手蹟ではありませぬ、外見はいかにもさうらしけれど、實はマリアの偽筆ぢやないナ。さういへばホンに卿を狂人ぢやと真先に注進したのはマリアぢやツた。丁度其所へ卿が、ニヤ／＼笑ひ乍ら、この手紙に注文した通りの様子をして入つて来たのぢや、モ、これ分つた、卿も疑ひを晴らすがよい。兎にも角にも酷い悪戯の標になつた卿には氣の毒ぢやが、かく魂膽も發頭者も、分明になつた上は、卿に原告の役も裁判の役も、一所に引き受けて貰はねばなりませんぬ。

フアビ 姫君、一言拙者からも御話し申し度うムります。世にも珍らしい今

日の目出度い席を今更喧嘩争論に汚すでもあるまいと存じますれば、それを豫じめ防がん爲めに、遂一白狀して了ひます。實は拙者とトロービさまとが、これなるマルツォーリオ氏に對して、今回の計略を工みましたので、つまり同人の舉動の、いさゝか傲慢不遜な所が、われわれの癪に觸つた次第なのであります。それからマリアどのが、トロービ様の切なる勸めによつて、この偽文を書いたのでムります。が、それがいかにも御苦勞とありて既に二人は婚禮の式を済ましてムります。すべて悪る氣半分、戲談半分の遣り口、お蔭様で双方とも平均に憂き目、祟り目の數々を嘗めましたのは、所謂喧嘩兩成敗、最負目のなき天秤にかけて見れば、怒るところか、寧ろ可笑しくて耐らぬことゝ存じます。



オリウ 可哀相に卿は衆から醜い目に逢はされた。

茶 イヤ、ある人は富貴の家に生れ、或る人は勳功を以て富貴を獲、又或る人は無理に富貴の地位に祀りあげらる。ぢやテ、實は拙者もこの狂言を仕組んだ一人、今一人はサー・トローパス上人でゐるが、それは何方も同一人物、これく茶坊主、拙者は決して狂人ではない！——誠にハヤ御尤も様、がコレ、マルツォーリオ様、貴所は覚えてゐるか、伯爵家の姫君ともあらせらるゝ者が、恁麼ナ無智の痴漢を面白がるはその意を得ませぬ、當方で笑つて見せなければ一言も口のさける奴てはない。——天運循環して首尾克讎が打てました。

マルウ え、何奴も覚えて居れ、今にこの返報はしてやるぞ。

と渺然として退場

オリウ ホンにマルツォーリオは飛んだ憂き目を見たものぢや。

公 誰ぞ追ひかけて、充分なだめて遣るがよい。船長の事は、マルツォーリオより聞く事を忘れたが、いよくそれが分明となり、すべてが滞りなく運ぶ上は、目出度合歡の儀式を挙げずばならぬ、オリウアに向ひ、兎に角、拙者達はしばらく御厄介になりますぞ、(ツィオラに向ひ) セサリオ、此方へ來や、小姓の服装する間は、卿は矢張りセサリオぢや、が、一坦衣裳がかはると、卿はオルシノの愛婦ぢや、愛妃ぢや。

と一同退場、茶坊主一人残る

茶 [歌ふ]

わしがちいさい小供の頃は、

こらさのよいさの風と雨、



いたづらしても氣にかけず、

日かな一日雨が降る。

わしが脊丈の延びたる頃は、

こらさのよいさの風と雨、

盗人こはさの門構へ

日かな一日雨が降る。

わしが女房を貰ふた頃は

こらさのよいさの風と雨、

力味ちからみで見てもはじまらず、

日かな一日雨が降る。

わしが寢床ひしどに入つた頃は、

こらさのよいさの風と雨、

酒にヨイ／＼酔ひ倒れ、

日かな一日雨が降る。

世界開闢よほどのむかし、

こらさのよいさの風と雨、

とにかく芝居は出揃ふた、

一同車輪に相つとめます。

と退場

幕



# 十二夜 終

明治四十二年十一月一日印刷  
明治四十二年十一月四日發行

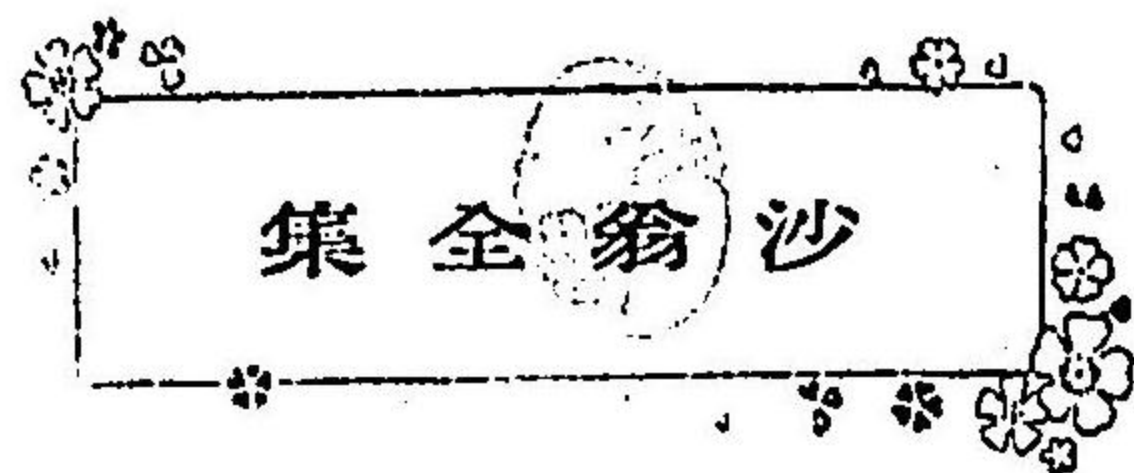
十二夜  
定價金九拾錢

著作者

淺野和三郎  
戶澤正保

印發行  
者兼

大日本圖書株式會社



發賣元

東京市京橋區銀座登丁目二十二番地  
大日本圖書株式會社  
大阪市東區北久太郎町四丁目十七番屋敷  
大日本圖書株式會社支社

東京市京橋區銀座登丁目廿二番地  
大日本圖書株式會社  
代表者 宮川  
事務取締役





大日本圖書株式會社特約販賣所

北海 村上商店、川南、航文會、一二堂、常貴堂、**東京府** 丸善、林平、大倉、水野、野野、三友、内田、杉木、文林堂、北隆館、泰東同文局、文里堂、中四屋、東京堂、文會堂、勉強堂、修學堂、二松堂、松邑、東海堂、有隣堂、十字屋、池田、**神奈川縣** 弘集堂、丸屋、勉強堂、**新潟縣** 高桑、高橋、免張、野島、萬松堂、目黒、柿村、**埼玉縣** 水野、高野、**群馬縣** 慎乎堂、**千葉縣** 多田屋、**茨城縣** 明文堂、川又、寺田、**栃木縣** 青木、**三重縣** 岩山、安屋、**滋賀縣** 川瀬、永東、**石川縣** 吉見、谷崎屋、三原屋、大石、**福井縣** 柳正堂、**岐阜縣** 郁文堂、郁文堂支店、**山梨縣** 日新堂、水學堂、朝陽館、西澤、盛文堂、**長野縣** 崎、松榮堂、英華堂、**富山縣** 佐藤、文明堂、**石川縣** 青霞堂、今泉、今泉支店、**山形縣** 盛文堂、牧野、八文字屋、**秋田縣** 昭堂、東海林、**宮城縣** 中田、學海堂、清明堂、**京都府** 若林、文港堂、松田、南渡、**大阪府** 金川、柳原、小谷、松村、開成館、寶文館、三宅、北村、今井、植田、**兵庫縣** 熊谷、石田、福浦、竹内、櫻師寺、四村、中井、**長崎縣** 松崎、**奈良縣** 文進堂、誠務館、**和歌山縣** 廣田、**鳥取縣** 品川、**石川縣** 宇都宮、**島根縣** 徳岡、今井、久松堂、**岡山縣** 安達、川岡、**山口縣** 奥田、武内、**廣島縣** 秋澤館、芸香堂、原田、**山口縣** 舍英堂、梅龍堂、日新堂、超世館、**徳島縣** 不安堂、**香川縣** 靜壽堂、**愛媛縣** 明益堂、開文會、**愛媛縣** 向井、土肥、足立、阿部、**高知縣** 富士越、**高知縣** 佐野、積善館、**徳島縣** 博文社、金文堂、**大分縣** 甲斐、**佐賀縣** 牧川、梅津、**熊本縣** 長崎、**鹿兒島縣** 修進堂、谷、**鹿児島縣** 吉田、金光堂、**沖縄縣** 小澤、**新加坡** 新加坡。

明治四十二年十二月

文學士戸澤姑射 文學士淺野馮虛共譯 (全部三十七卷)  
**沙翁全集**

◎第一卷	ハムレット	姑射譯	郵定	稅價	金八拾五
◎第二卷	ロメオ	姑射譯	郵定	稅價	金八拾
◎第三卷	ヴェニス	馮虛譯	郵定	稅價	金八拾
◎第四卷	オセロ	姑射譯	郵定	稅價	金八拾五
◎第五卷	リア王	姑射譯	郵定	稅價	金八拾五
◎第六卷	から騒ぎ	姑射譯	郵定	稅價	金八拾五
◎第七卷	シザ	姑射譯	郵定	稅價	金九拾
◎第八卷	御意のまま	馮虛譯	郵定	稅價	金九拾
◎第九卷	行違物語	姑射譯	郵定	稅價	金七拾五

本集は抄譯に非ず梗概に非ず忠實親切を旨としたる完全譯なり文壇の至寶として永く後世に傳ふべきものは即ち是



高崎男爵序歌  
大隈伯爵題辭  
文學士 中村徳五郎 著

〔菊判美裝全壹冊〕  
定價 金壹圓六拾錢  
郵税 金 八

# 日本開闢史

本書は著者十年間の研究に成れる前代未聞の大著述にして從來學者の疑義に屬し神秘を以て蔽はれたるものは皆悉く徵證解説を遂げ雲霧を排きて天目を見るの感あり苟も日本臣民たる者特に治者の位地に立てる人々は必ず熟讀玩味して以て國民教育に資せざるべからず

發行所

東京市銀座一の二三  
大阪東區北久太郎町

大日本圖書株式會社

平出鏗二郎著 文學博士藤岡作太郎補

〔菊判美裝全壹冊〕  
定價 金壹圓參拾錢  
郵税 金 八

# 近古小説解題

勃率無文の世、還て筆華の絢爛を見るは鎌倉時代の小説なり、擾々還亂離の間時に優麗媚雅の文字あるは、足利時代の神史なり、本書はその純を擇び粹を抜き解題する所のもの、無慮二百五十餘部に及べり、凡時尙風俗の眞を窺ふべきもの、小説に若かずとすれば、本書は則ち獨り小説として趣味あるのみならず、正に兩時代の背景たるべく、東山の花影 七里浦の月光眼前に彷彿たるべし。

發行所

東京市銀座一の二三  
大阪東區北久太郎町

大日本圖書株式會社



アーベング 原著  
 文學士 淺野馮虛譯  
 チツケンス 原著  
 文學士 淺野馮虛譯  
 ゴールドスミス 原著  
 文學士 淺野馮虛譯  
 エマーソン 原著  
 文學士 大谷繞石譯  
 エマーソン 原著  
 文學士 大谷繞石譯  
 ホーソン 原著  
 松本信夫譯  
 ジョーンズ 原著  
 芝野六助譯  
 ワイニング 原著  
 文學士 片山正雄抄譯  
 帝國文學會編纂  
 帝國文學會編纂

スケッチブック (三)  
 クリスマスカロル (全)  
 ヴイカー物語 (全)  
 偉人論 (全)  
 惠馬遜傑作集 (全)  
 ツワイストールドテールズ (全)  
 羅世刺斯傳 (全)  
 男女と天才 (全)  
 シルレル紀念號 (全)  
 文豪小泉八雲 (全)

定價金壹圓  
 郵稅拾貳錢  
 定價金四拾錢  
 郵稅六錢  
 定價金五拾五錢  
 郵稅八錢  
 定價金五拾錢  
 郵稅八錢  
 定價金五拾錢  
 郵稅六錢  
 定價金六拾錢  
 郵稅八錢  
 定價金四拾錢  
 郵稅六錢  
 定價金六拾五錢  
 郵稅八錢  
 定價金四拾五錢  
 郵稅三錢  
 定價金貳拾五錢  
 郵稅二錢



71  
69

